

本軍の勝利であった。

八月二十一日、三好野飛行場へ武器を並べて、ノモンハン以来勝つたことのないソ連に勝つた我々は、敗れたソ連の軍門に降るといふ情けない仕儀になってしまったのである。

軍は解散され一〇〇〇人単位で作業大隊となり、十一月シベリアに移送された。それからは飢えと寒さと重労働との戦いであった。

## 戦いすんで

山口県 富永繁久

ハワイの真珠湾を攻撃して以来各海戦に参加、赫々たる武勲を残し全く無傷だった「瑞鶴」は、幻の航空母艦とか鬼神の航空母艦などともいわれて、敵には恐怖感を与え、また友軍の間では羨望の的ともなっていた母艦ではあった。しかし、昭和十九年六月十九日のマリアナ沖海戦で、敵空軍による至近弾数発を受けて艦は小破、兵

員も四〇数人の犠牲者を出した。その後「瑞鶴」は呉のドックに入って修理、それまで日本が各国におくれをとっていた電波探信機を搭載し、やがておとずれるレイテ沖海戦に備え僚艦とともに大分県の別府沖で航空戦の訓練に励んでいた。

そのころのことであつたと思う。飛行甲板をひとり私 が歩いていると、向こうからいかめしく正服を着用した士官が静かに歩いてくるのが見えた。私はその士官の数歩前まで近づくと立ち止まって拳手の礼をとつた。するとその士官は鷹揚に右手をあげて答礼をした。私はその時その士官が誰であつたか知る由もなかつたが、後になつてその士官が先年逝去された高松宮殿下であり、殿下はその時「瑞鶴」に搭載された電波探信機見学のため乗艦されていたということを知った。

閑話はさておいて、航空訓練もいよいよ熟したころわが「瑞鶴」から戦闘には不要な物品が次々と陸揚げされ、かわりに木材や浮遊物などが積み込まれているのを目撃した。私は出撃の日が真近に迫つたことを知り、我々もいよいよ海の特攻隊になる日がきたのだと思つた。

越えて昭和十九年十月二十日の、それも午後の二時ごろだったと思う。なおそれより先に小沢治三郎司令長官を迎えていた「瑞鶴」は、当時、第一航空戦隊の旗艦となっていたが、その「瑞鶴」を筆頭に、航空戦艦の「伊勢」、航空母艦の「瑞鶴」「千代田」「千歳」など四の艦船は数隻の駆逐艦に護衛されて、別府湾から一路南方へ向かって出撃した。がしかし、これから展開されるであろうその作戦や戦闘のことなど、我々のような一兵卒にわかるはずもなかった。我々が「瑞鶴」をはじめとした数隻の空母、戦艦、駆逐艦を擁した艦隊は、刻一刻とやがて修羅の戦場となるレイテに近づきつつあった。

別府沖を出てまもなく「瑞鶴」の艦橋ではZ旗がはためき、艦内のスピーカーから絶えず軍艦マーチの曲が流れていた。また、かつて日露海戦でその旗艦であった戦艦「三笠」艦上で、連合艦隊司令長官の東郷平八郎が全艦に発したという「皇国の興廃此の一戦にあり、各員一層奮励努力せよ」の名科目もしきりにアナウンスされていた。

いよいよ彼我決戦が始まろうとする昭和十九年十月二

十五日黎明、「瑞鶴」艦上から数十機の艦載機が刻を置いて次々に飛び立っていった。午前八時ごろ警戒警報とともに「全員戦闘配備につけ」の号令スピーカーから流れる。我々主計科員は当直員を除き非番直の兵員はそれぞれの配置箇所へ急行する。主計科員は戦闘ともなればほとんどの兵員が高角砲などの運弾員（彈薬運搬員）としてその使役に出ている。私も先のマリアナ沖海戦では後部左舷の高角砲運弾員を勤めたが、この度のレイテ沖海戦では、前部右舷に新設された噴進砲の運弾員に配置されていた。一五・七㍉の高角砲弾は四〇㍉近くもあって運ぶのに苦勞もあったが噴進砲の砲弾はそれに比べるにはるかに軽かった。

戦闘用意の号令が発せられたころ、朝の陽を背にした敵機がはるか遠くの雲間で、その銀翼をキラキラと輝かせながら猛スピードでわが艦船群に迫ってくるのが見えた。その数およそ数百機の敵艦上機群である。

いよいよ決戦の火蓋は切られた。戦闘喇叭（ラッパ）が艦内に鳴り響き、「戦闘用意」「撃て」の号令とともに、左右前後各部に搭載されている一六門の高角砲が先

ず砲門を開いた。続いて噴進砲や機銃が火を噴き、その壮絶な轟音はまるで百雷が一時に落下した感があつた。またその弾幕は、打ち上げられた花火のように空へ拡がって海を覆い、その幕間をかくぐって突入してくる敵の機影が間近かに見える。その間もわが「瑞鶴」は絶えずジグザグ航行を続けながら敵の魚雷や投弾を避けつつ応戦する。しかし延べ数百機にのぼる敵機の集中攻撃に遭つては如何ともしがたく、艦は爆弾や魚雷を数発も受けて速力も減退、やや左舷に傾いたままの状態で防戦し続けていた。

我れを忘れて弾運びをしていた私が、ふと下甲板を見おろしていると、単発式の機銃に一人の兵科（水兵科）の兵員がとりついて、真っ赤になつた銃身を空へ向けて盛んに撃ち続けていた。そのうちその兵は身体はどこかを撃たれたのであろうか、どつと倒れてそのまま動かなくなつてしまつた。すると別の兵が飛びだしてきて撃ちはじめたが、その兵もまた倒れて、次の兵がかわつて撃つという、凄惨な場面を展開した。そうして数人の兵が倒れた後、最後に残つた兵も倒れながら蒼白の顔を上甲

板にいる私に向けて、

「おい、そこにいる兵、俺のかわりに撃つてくれ、たのむ」

とふりしぼるような声で叫ぶ。機銃の側に折重なつて倒れている兵たちの身体から噴きだした血が、見る見る中にデッキを赤く染めてゆく。私はその短い時間にしかも狭い空間の中で、たしかに戦争という修羅場を見たような気がした。ところで主計科員の私には悲しいかな機銃を撃つ方法がわからない。また、運弾員という配置にあつて、みだりに持場を離れることは許されるものではなかつた。私はその兵に心の隅までは「すまない」と詫びながら、その兵の悲痛な叫びにかたく耳を閉じつづけていた。

その間も絶えず攻撃の手をゆるめない敵機から、次々に発射される魚雷数本が艦底のどこかに命中、そのたびに不気味な鈍い音がして艦全体が大地震に遭遇したかのように震動する。そのうち機関部が破壊されたのか、艦はなお左舷に傾きながら遂に停止してしまつた。

艦はますます傾斜し、左舷は上甲板までほとんどが海

水に浸って高角砲も機銃も海の中に没していた。それでも右舷の高角砲と機銃は火を噴いていたが時間を経るに従ってそれも途絶えがちになった。それを境にして敵機は低空から攻撃を始め、ほとんど沈黙、無抵抗の状態となった艦や我々を銃撃する。物陰からそっと顔を出して見上げると、敵機の搭乗員が機から身をのりだすようにして我々を見降ろしている。そうしてその顔は、まさしく勝ち誇った勝者の閻魔の笑顔のように私には思えた。

午後も二時を過ぎたころであったと思う。総員整列の号令がかかり、生き残った兵は四五度にも傾いた右舷飛行甲板の端に立った。軍艦旗の降下である「総員軍艦旗に対して敬礼」の号令がかかる。これまでに永く艦橋で翻り続けて、栄光の航空母艦「瑞鶴」の雄姿に花を添えていた軍艦旗も、ついに時ならぬ刻に降下される日がきたのである。誰からともなく斉唱されはじめた「君が代」に合わせて総員が唱和する。その間しづしづと軍艦旗はおろされていった。杳然と立ちつくす兵の間に声もない。軍艦旗降下の時を以って「瑞鶴」はその幕もおろした。

後日聞いた話によると、降下された軍艦旗は副長が腹

に巻いて海へ入ったそうであるが、その副長も戦死。また艦長（貝塚大佐）も艦と運命をともしたと聞いた。

軍艦旗が降下されると、艦長（副長だったかも）から総員に対して退艦命令が出た。その命令を聞いた残存の兵たちは、各自おもしろい場所から海の中に身をおどらせた。私も傾いている飛行甲板を滑り台にして海に入る。その時私が身に付けていたものは第三種軍装（戦闘服）の上衣（下衣は泳ぎに不都合があるということでも事前に脱ぎ捨てるように指示されていた）と裸一木、それを先に配付されていた長い晒木綿（フカに対しての防御用）に故郷の母から送られていた千人針（今も保存）だけであった。

既に艦の沈没を予期してのことか、海面には浮遊物や材木等が投棄されて波間に漂っていた。そしてそれらの浮遊物には蟻が獲物にむらがるように兵たちが取り付いていた。私も三人の兵が取りすがっている丸太に手をかけた。すると先に掴まっていた兵たちが一様にしぶい顔をして私を見る。無理もない。この丸太にさらに一人の重量がかかればその兵たちの生死にもかかわること

だから。それでも私は見知らぬ海の果てで死にたくはなかった。私は素知らぬふりして、しばらく丸太に取り付いていた。

長い時間のようにも思えた。するとすぐ近くで

「おお、そこにおるのはお富さんじゃあないか」

という声があった。聞き覚えのある声で振り向いて見ると、在艦当時からなにくれと目をかけてくれていた山本兵曹の姿があった。「ああ山本兵曹」、私は叫んで、驚きと嬉しさの感情が急に胸を突き上げてきた。それは私にとって、地獄で仏に会えたような感じがしたからだった。

「お富さん早くこちらへこい」

山本兵曹が声と一緒に手招きをする。私はそれを機に嫌われていた丸太を離れ、山本兵曹が掴まっている板切れに泳いでいった。

戦闘になってからそれぞれの配置が違っていた山本兵曹と私、その私にまさか生きて再び会えるとは思っていなかったらしく

「お富さん、お前よく生きていたな」

山本兵曹は感慨深げにそう言って、私が生きていたこと

を心から喜んでくれた。

今、私が掴まっている板切れには、山本兵曹の他にも一人全く面識がない兵が掴まっていたが、その兵は見ただきりではかなり衰弱しており板切れにやっと掴まっている状態だった。私が板切れにつかまると山本兵曹はすかさず「さあ、これから泳ぐぞ。艦から一〇〇呎は離れていないと危ない」という。私もそうしてもう一人の兵もうなづいて、片手で板切れを抱くと、もう一方の手を駆使、必死で泳ぎながら艦から離れていった。そうして泳ぎながらの途中、ふと振り返ってみると、ああ、そこには、真珠湾攻撃以来、幾多の戦歴とその栄光に輝き続けてきた二万七〇〇〇屯の「瑞鶴」が、艦首を空へ向けて今しもその巨体を静かに南の海へ沈めようとしているところであった。

そのころ太陽は中空にあって海はまだ温かだった。私はその時、ああ助かったと一度は思った。しかしそれはただ沈んでゆく艦の渦に巻き込まれずすんだというだけのこと、私を含めて海上に浮いている生存者すべてがその後生きた地獄であった。あたりを見渡すと、これ

まで「瑞鶴」に付き従ってきた「瑞鳳」「千代田」「千歳」三空母の雄姿は既になく、今はただ、ここレイテの戦場まで艦隊を護衛してきた駆逐艦群が、はるかに遠い海上で敵と交戦をしている音がきこえているだけで、つくづく敗者のわびしさを感じた。

「よいか、集団から離れるなよ」と山本兵曹が私達に注意した。もし助かることがあるならと山本兵曹は前置きして、次のようなことをいって聞かせた。

「救助する側が先ず考えることは集団、その集団の中におれば優先的に救助されるはず」と。曆戦のつわ者、山本兵曹は過去の経験からそのことをよく知っていたのである。そうした集団の中で誰かが叫ぶ。「士気を鼓舞するため今から『海ゆかば』を歌おう」

その兵の口から歌が流れ始めると、その声につられたかのように『海ゆかば』の大合唱が海上で始まった。そうすることによって兵たちは時のうつろいもまた自分の命のいつ果てることさえも忘れて、繰り返し繰り返し歌い続けていた。

『海ゆかば』の歌が盛んに歌われていたころ、一度は

固まっていた集団も時を経るに従い、負傷兵や疲労度のはげしい兵などが次々に集団から離れ海に拡がった。その間でも敵の艦載機が我々の頭上に現われて、無抵抗な漂流者に情容赦なく銃撃を浴びせる。無気味な音と共に銃弾が波間に跳ねて、その度に幾人かの兵が波の上から消えていった。

今度はおれの番かも知れない、そうした思いを幾度も味わいながら、ややもすると疲れ果てた身体が攔まっている板切れから離れそうになる、すると山本兵曹が私の身体を叩いて大声で吐りつける。「こらっしっかりせい。手を離したらもうおしまいだぞ」と。

しばらくすると今度は睡魔が襲う。ねむい。ねむくてねむくて仕方がない。遠くから私を呼んでいる誰かの声がする。その声は山本兵曹の声のようでもあり、また懐かしい故国で私の安否を気遣いながら待っているであろう父や母の声のようでもあった。私がそうして生死の間をさまよっているころ、同じ板切れに取り付いていた兵がいつか波にのまれてきえていった。「彼もとうとう力尽きたか」そう思うと一抹の淋しさが心に残る。しかし

私はその兵の死によって発奮した。「ようし、生かされるものならおれはいきぬいてみせるぞ」とそうしてまた、このうえ山本兵曹にも心配をかけてならぬと心の中で誓った。

太陽が水平線上に傾くとその反射で、紺碧というより幾分か黒ずんだ海面が一層無気味な色を見せた。遠くではときおり残存の我が艦船がまだ発砲している音が聞こえており、敵もなかなか執拗である。

『海ゆかば』の歌声がいつの間にか海上から消えていた。それは今、誰しもが浮遊物に取りついているだけで精一杯だったからである。その兵たちの頭上に幾度となく飛来する敵機が銃撃を加えては去っていく。そのたびに幾十人幾百人の無惨な犠牲者を生じたことかも。

太陽が沈むと南海もさすがに寒い。まして長時間海水につかったままの状態は肌身にこたえた。

そのころになって一隻の駆逐艦が我々のいる場所へ全速でやってきた。駆逐艦は集中している兵のまっ只中を分け入るように入ってくると、艦を停止して近くににいる兵たちを次々と救出してゆく。しかし私や山本兵曹のい

る場所から駆逐艦は遠かった。私はとても救出される見込がないと思い、次々に救助されている兵たちの光景をぼんやりと眺めていた。

駆逐艦は一定の救出が終わるとまた全速でその場を離れてゆく。敵機や敵の潜水艦を警戒しての行動である。

それから数刻後、あたりが少し薄暗くなつて先刻の駆逐艦が再び現われ私たちの側で停止した。駆逐艦が停止すると同時に艦上から数十本のホースが海におろされ、そのホースにつかまった兵たちが先を争うようによじ登つてゆく。私の目の前にも一本のホースがあった。山本兵曹が早速そのホースにつかまると、

「俺が先に登るから富さんすぐ登ってこいよ」

という。私も山本兵曹に続いてホースをつかんだが両の手の力が全くなつてどうしても登ることができない。私が登りあぐねていると、すぐうしろにいた下士官が私の体を乗り越えてよじ登ろうとする。ふりむきながら顔を見ると、その下士官は、「瑞鶴」がまだ健在のころの甲板下士官でその顔面は私もよく覚えていた。

甲板下士官というのは職掌名で、艦隊のいずれの艦船

にも若干の下士官が在職していた。また陸上部隊でも同様で、甲板下士官はいわば海軍部内の規律肅正についてのお目付役として置かれていたものであるが、それは表向きで質のよい下士官は余りいなかった。なかには人情豊かな甲板下士官もいるにはいたが、ほとんどの甲板下士官が職務を嵩に着て高慢で居丈高なところがあり、兵たちには、嫌われる存在であった。

特にこの鬚面の甲板下士官は「瑞鶴」きつての嫌われ者だったからその鬚面の顔は艦内の兵たちの間でだれもがよく知っていた。私もそんな甲板下士官と競り合ったものだから分が悪かった。彼はホースをつかんでいる私の手を剥ぎ取るようにして自分がホースをつかみ、私の両肩に足をかけて踏みつけながらホースから私を離そうとする。それでもなお必死でホースに取り縋がっている私を鬚面の甲板下士官は幾度も足蹴りにした上、艦上へ登っていった。

ぐったりした私は放心状態のままやっとホースにつかまっていた。すると上から「ホースを体に巻きつけろ」

という声がある。私はある限りの力をふりしぼって体にホースを巻いた。巻き終わると艦上の乗組員たちが私を艦上まで引き揚げてくれた。「ああ助かった」と思った瞬間、安心した私はその場で失神してしまった。どれだけの時間が過ぎたのであろうか。甲板ではそのまま倒れていた私の頬を叩くものがあった。遠くで私を呼んでいる声がする。目を開くと私の頭の上に山本兵曹の笑みを含んだ顔がのぞき込んでいた。

弱冠十八歳、死の彷徨の記録である。